

日本接着歯学会
専門医研修カリキュラム

神奈川歯科大学附属病院 保存・修復診療科

1. 研修の目標

1) 研修終了後の成果 (Outcome)

接着歯学に関する最新の専門的知識と臨床技能を修得することはもちろんのこと、接着歯科治療の進歩発展と向上を図り、国民の信頼を得ながら国民の健康維持増進および保健福祉の推進向上に寄与する専門医となる。

本研修施設において専門医を取得するために、以下に示す研修を履修する。

- (1) 接着歯科治療の治療計画の立案
- (2) 接着歯科治療材料の種類と特徴
- (3) 直接法接着歯科治療の術式と特徴
- (4) 間接法接着歯科治療の術式と特徴
- (5) 被着体に対する接着処理法と接着術式
- (6) 接着歯科治療症例の再治療（リペアを含む）
- (7) 接着歯科治療症例の管理（メンテナンス）

2) 到達目標

(1) 専門知識

- ① 接着歯科治療の治療計画を立案できる。
- ② 接着歯科治療材料の種類と特徴を説明できる。
- ③ 直接法接着歯科治療の術式と特徴を説明できる。
- ④ 間接法接着歯科治療の術式と特徴を説明できる。
- ⑤ 被着体に対する接着処理法と接着術式を説明できる。
- ⑥ 接着歯科治療症例の再治療（リペアを含む）を説明できる。
- ⑦ 接着歯科治療症例の管理（メンテナンス）を説明できる。

(2) 専門技能

- ① 接着歯科治療の治療計画に基づく接着歯科治療を実施できる。
- ② 接着歯科治療材料を選択できる。
- ③ 直接法接着歯科治療の特徴を活かした術式を実施できる。
- ④ 間接法接着歯科治療の特徴を活かした術式を実施できる。
- ⑤ 被着体に対する接着処理法と接着術式を実施できる。
- ⑥ 接着歯科治療症例への再治療（リペアを含む）を実施できる。
- ⑦ 接着歯科治療の管理（メンテナンス）を実施できる。

(3) 診療態度

- ① 医の倫理に配慮できる。
- ② 医療安全に配慮できる。
- ③ 感染予防対策に配慮できる。
- ④ 患者とコミュニケーションできる。
- ⑤ 他職種医療関係者とコミュニケーションできる。

(4) 学術的姿勢

- ① 常に患者から学ぶ姿勢を基本として治療できる。
- ② 科学的思考とエビデンスに基づいて診断できる。
- ③ 科学的思考とエビデンスに基づいて治療できる。
- ④ 生涯学習により自己研鑽できる。
- ⑤ 接着歯学に関する研究を遂行できる。
- ⑥ 接着歯学に関する研究成果を学術大会や論文で発表できる。

3) 経験目標

研修において履修すべき症例は、日々の臨床において経験する症例と大きく異なることはなく、接着歯科治療としての特別な症例はない。しかし、専門医として、これらの症例に対し、接着歯科治療の特徴を活かしたミニマルインターベンションの概念に基づく治療法を実施することにより、これまでの歯科治療と比較して歯質削除量と歯髄刺激・為害性を格段に抑えた低侵襲の処置と歯質との接着一体化がなされた治療が可能になる。この治療法により患者の個々の歯の寿命を存え、口腔内の変化を最小限に抑えることが可能になり、ひいては患者の生涯にわたる健康維持増進につながる。

(1) 経験すべき症例

- ① 齲蝕症
- ② 歯の損耗 (tooth wear) : 摩耗症、咬耗症、酸蝕症、アブフラクション、くさび状欠損など
- ③ 歯列異常 (歯間離開、捻転歯など)
- ④ 歯の形態異常 (矮小歯など)
- ⑤ 歯冠修復 (歯冠補綴)
- ⑥ 歯の欠損症 (少数歯欠損)
- ⑦ その他: 接着歯科治療により歯の保存が期待できる疾患 (歯根破折など)

(2) 経験すべき処置・修復 (医療面接・検査を含む) 及び経験症例数
処置・修復

① 直接修復

ア) コンポジットレジン修復

イ) コンポジットレジンブリッジ

② 接着歯冠修復（接着歯冠補綴）

ア) レジンコーティング

イ) レジンコア（含ファイバーポスト併用）

ウ) 接着ブリッジ

エ) メタルフリー

③ デジタルデンティストリー

ア) 光学印象

イ) デジタルワークフロー

ウ) CAD/CAM

エ) メタルフリー

④ その他

経験症例数

<臨床実績>

① 経験症例報告 症例数：5年間で10症例 症例に対する考え方、治療法の選択理由、治療経過・管理内容、接着歯科治療による成果などを記載し、口腔内写真（術前、術中、術後）を必須とする（科学的根拠のない独自の方法や材料を用いた症例は不可とする）。また、提出症例は申請時までの直近5年間の症例とする。なお、上記10症例の中から認定試験における長期症例1症例と短期症例2症例を選択し専門医申請時に6号様式にて提出する。これらの症例に対しては口腔内写真の他にエックス線写真、研究用模型等の関係資料を必要とする。

② 経験した症例数を主とした臨床実績 症例数：5年間で120症例 治療部位、診断名、治療内容、カルテ番号など要点を箇条書きで提示する

（3）学術活動

症例を経験するのみならず、経験した症例を基に接着歯科治療専門医としての姿勢をさらに深めていくために、自己研鑽を生涯にわたり行うことが大切である。そのための学術活動として、細則第15条（研修施設において取得すべき業績）に示す研究論文発表及び学術大会での発表を行う。

（1）研究論文を1編以上、本会発行の学会雑誌「接着歯学」若しくは「Dental Materials Journal」に発表する（共同著者可）

（2）学術大会発表は、本会学術大会で1回以上演者として行う（共同発表可）

2. 研修の方法

1) 具体的な研修方法

(1) 共通研修（臨床現場以外での研修）

- ① 医療倫理
- ② 医療安全
- ③ 院内感染対策
- ④ 患者・医療従事者との関係の構築
- ⑤ 医療関連法規など
- ⑥ 地域医療
- ⑦ 隣接医学

(2) 専門研修

① 必修研修（臨床現場以外での研修、自己学習）

ア) 接着歯科治療に必要な基礎・臨床における専門的知識の修得

- a) 学術大会参加、研修会参加（研修期間中は本会学術大会に原則参加すること）
- b) 研修施設における勉強会、症例検討会などの参加
- c) 参考図書などによる自己学習

参考図書：日本接着歯学会編 接着歯学 第一版、第二版

イ) 研究業績

- a) 研究論文を1編以上、本会発行の学会雑誌「接着歯学」若しくは「Dental Materials Journal」に発表すること（共同著者可）
- b) 本会学術大会で1回以上演者として発表を行うこと（共同発表可）
- c) 細則にある研修単位を満たすこと

② 選択研修（臨床現場での研修）

経験目標を満たすよう、各研修施設の特徴・特色に基づき研修項目を任意に選択し研修を行う。

3. 研修の評価

1) 形成的評価

- (1) 自己評価（年1回）
- (2) 指導医によるフィードバック（年1回）

2) 総括的評価

到達目標の達成度を総括的に把握するために、研修期間中に指導医は専門研修医から提出される臨床実績の資料を基に専門的診療能力について評価を行う。必要に応じて指導医の立会のもと実技試験を行い評価する。また、研修修了後、指導医は臨床実績と経験症例報告（10症例）の全ての資料に基づき口頭試問を行い到達目標の達成度を評価する。

3) 多職種評価

専門研修医に対する評価として、指導医のほか医療・歯科医療スタッフなど多職種からの評価も考慮することが望ましい。指導医は各施設の医療スタッフなどに回答を無記名方式で依頼し、歯科医師としての適正、他職種とのコミュニケーション、患者との関係の構築などを他職種が評価する。指導医は評価結果に基づきフィードバックを行い専門研修医に改善を促す。研修期間中における形成的評価とする。